

視察の日程第2日目・2018年5月9日（水）

視察先・福岡県大木町

○視察のテーマ

- ・バイオマス資源（エネルギー源として利用する生物体）の利活用について
- ・おおき循環センター「くるるん」の概要と状況について

○視察の内容

大木町環境課 生活環境係長の石川さんによる説明。

「おおき循環センターバイオマスプラント」の見学と現場説明。

○福岡県大木町の概要

福岡県の南西部に位置し、人口1万4000人と18平方キロの面積をもつ町。

大都市の福岡市や久留米市への通勤圏内にある。

特産品は、いちご・えのき・花ごぞ等。

○大木町に「バイオマスプラント」がある理由

1、平成19年、国際条約で、町のし尿などの海洋投棄が禁止された。それまで町は、し尿の海洋投棄を行ってきたが、国際条約の発効をきっかけにして「生ゴミ・し尿汚泥の資源化」を検討し、同時に「地域循環システムづくり」と「子どもたちの時代につけを残さない地域社会づくり」を決意した。

2、大木町は「バイオマス構想」を立ち上げる。それは、町内すべて浄化槽（し尿や下水）であり、それを回収・利用した発電プラント工場を作ること。町は、プラント工場が生み出す電気を売電せず、全て町内の施設で利用している。プラントから出る温水も施設内で暖房や洗浄時に利用している。一方、プラント工場からは年間6000トンもの液肥が出る。その液肥は、町内の住民に無料で提供し、住民は、お米の栽培や「菜の花オイル」などの加工に利用している。ちなみに学校給食は、地元産を使っている。

3、バイオマスプラントによる効果は、まずゴミが半減したこと。第二に、工場や併設されているレストラン（道の駅）などで働く人員を必要とするため、雇用が増えたこと。第三に、従来「ゴミ」として埋め立てていたことが「エネルギー」となったため、埋め立て自体が不要になったこと。これらの効果は、町全体としてコスト減や地域農業への貢献、さらには環境負荷の軽減につながった。「ゴミ」「エネルギー」に対する市民意識も向上したという。大木町では、ごみの分別が進み、リサイクル率は8

0%を超える。こうした取り組みは発展し、現在、「廃食用油」でBDF製造プラントも作り、町内を走る「生ゴミ収集車」の燃料として賄っている。

○所感

大木町は10年前、ゴミ問題を正面から受け止め、積極的に解決に向けて独自の施策を打ち出した。それが今では最先端の技術と普及に取り組んでいるモデルケースとして発展し、新都市にも活かせるのでは？と勉強になった。大木町の「バイオマス構想」は、町内から出る「し尿汚泥」と「生ゴミ」を全て回収し「プラント工場」に集め、それを「電気」と「温水」と「液肥」に変え、さらに町内で利用するという「リサイクル」を作り上げようとしたこと。ここには、尿汚泥や生ゴミを「厄介物」ととらえずに「宝の山」と考える、180度の認識転換と開拓者としての勇気ある実践があると思った。

2008年、大木町は「もったいない宣言」を行い、主に3つの宣言をした。①先人の暮らしの知恵に学び「もったいない」の心を育て、無駄のない町の暮らしを創造します。②もともとは貴重な資源である「ごみ」の再資源化を進め、平成28年度までにゴミの焼却・埋め立て処分をしない町をめざす。③大木町は、地球上の小さな小さな町ですが、地球の一員としての志を持ち、同じ志を持つ世界中の人々と手をつなぎ、持続可能なまちづくりを進めます（以上、08年3月11日大木町議会決議）。

驚いたことは、視察中、ほとんど臭いが気にならなかったこと、工場横に「道の駅」（広場・公園・ヤギを設置）を作り、そこにレストランを併設し、連日町内外からのお客さん、若い家族で賑わっていたこと。レストランで働くひとは主に町民で、そのため雇用も増えている。レストランのお米や食材は、工場から出た「液肥」で育てたお米や野菜を使っており、実際に食事をしたが、とても美味しかった。また町民のなかで苦情はほとんどなく協力的で、毎週2回の生ゴミ収集が定着したため、生ゴミ処理費用（毎年3000万円）が不要となったこと、その予算を市民の福祉向上のために還元している、とのこと。こうした大木町の取り組みは広がり、今年から隣町のみやま市（人口4万人）が、大木町の生ゴミのプラント工場をモデルにして、廃校したグラウンドを利用した「バイオプラント」を建設、10月から稼働する予定。大木町は「リサイクルの技術のまち」として有名となり、各企業は「使用済みオムツ」をリサイクルして「家の外壁材」へと再生産している。町にはプラスチックをリサイクルする新たにチップ工場と企業が誘致される予定、とのこと。町の「ごみ」再資源化が、町内の経済の活性化までつながっている。

いま大木町は、国に「デポジット制度」の確立を訴えている。使い捨てを防止するため、商品を保存し一定量を満たすと換金できる制度である。いまや全国各地から毎年3000～4000人の視察があり、アメリカ・中国・ブラジル・インド・韓国・エジプトなどからも来訪とのこと。

新城市では「浄化槽」が少ないため、大木町のようなバイオマスプラントをそのまま導入することは難しいかもしれません。しかし「大木町もったいない宣言」や循環のまちづくりの精神や考え方は、大いに参考になると思う。私は、ゴミや廃棄物に対する市民の声をよく聞き、知恵と工夫を出し合って、新城市には新城市なりの森林・間伐材利用なども含めた「持続可能な環境・リサイクルのまちづくり」が出来るのではないかと考えさせられた。

以上

